「つながり」と「寛容」

校長　野村　健一郎

若葉、青葉の光る、風薫る５月となりました。新学期も1か月が過ぎ、入学当初は、緊張のためか伏目がちで、小さな声を出すのが精一杯だった1年生も、最近は、元気よく、大きな声で、挨拶をかわしてくれます。３年生は、修学旅行に向けた具体的な取り組みがいよいよ始まり、クラスごとに沖縄で訪れる場所を決めたり、平和祈念公園に奉納する折り鶴の作製をしたりしています。先週からは、新たに1年生を迎えて、３学年そろっての部活動が開始されました。どのクラブも、２年生が1年生に積極的に声をかけて、盛り上げている姿を目にします。いよいよ再来週、２、３年生は、新学年になって最初の定期考査を迎えます。みんな、頑張ってほしいと思います。

保護者の皆さま、お忙しい中、春季懇談にご来校いただき、ありがとうございました。懇談で伺ったお話を子どもたちの健やかな成長につなげてまいりますので、今後とも、よろしくお願いいたします。

先日、辻村深月氏の「この夏の星を見る」という小説を読みました。この小説は、コロナ禍の下、行事や部活動など学校生活の多くが制限される中で、不自由でやるせない思いを抱えつつも、前を向きながら進んでいく中高生たちのつながりをテーマにした物語です。読みながら思わず涙が込み上げてくるようなとても良い作品でした。生徒のみなさんにもぜひ読んでほしいと思います。

さて、この小説を読み始めて、４年前のこの時期のことをあらためて思い出しました。２０２０年３月２日に始まった全国一斉休校ですが、５月初旬は、未だ休校措置が明けず、入学式も始業式もないまま新学年を迎えていました。1日も登校することなく、それぞれが自宅で YouTube に公開された動画で授業を受け、学習プリントの配布や課題の提出は郵送でやり取りされていました。５月中旬からは分散登校とオンラインホームルームが始まりますが、全員が登校できるようになるのが６月１５日でしたので、この時期、子どもたちは、人との触れ合いが絶たれた日々を過ごしていました。また、休校措置の解除後も、感染の不安と生命の危機に怯えながら、学校生活が進められていました。この時期、教職員の多くは、「新しい生活様式」の下、何が正解かわからないまま、日々の教育活動や行事の進め方、部活動の練習方法や大会運営の方針などをめぐって、職員会議や各校の部活動顧問の集まりの場などで、子どもたちの教育活動の充実と生命の安全との狭間で、それぞれの思いや考えをぶつけ合うようなこともありました。

「分断」と「対立」。これは「この夏の星を見る」の中にも何度か出てくる言葉です。コロナ禍において、人と人とのつながりは「分断」され、各々が掲げる正義のもとに「対立」が生じるような光景が社会の多くの場所で見られました。そんな不安な時期を超え、新型コロナウイルスが５類に移行してから、１ 年が過ぎて、多くの教育活動が制限なく行えるようになりました。４年前の混乱した日々を省みると、今のこの状況はそれだけですばらしく、日常に感謝するとともに日々を大切に生きて行かなければならないとあらためて思います。そして、さまざま教育活動が可能となった今だからこそ、コロナ禍を体験してきた子どもたちにとって必要な教育がどういったものであるかということを見つめ直し、取り組みを充実させていかなければないと考えております。

「分断」と「対立」の対義語は、「つながり」と「寛容」だと言われています。子どもたちが人と人との「つながり」の大切さを実感したり、多様な社会を生きていくために「寛容」の心を持てたりするよ

うな取り組みを、今後の教育活動の中でいっそう推し進めてまいります。保護者、地域の皆さまにおかれましても、子どもたちが「つながり」と「寛容」の心を育むことのできるよう、温かい目で見守っていただくとともに、お支えいただければ幸いに存じます。

初夏に向かうこれからの季節、熱中症など体調を崩しやすくなる時期でもあります。皆さま、健康にはくれぐれも気を付けてお過ごしください。